

心身問題 —創発主義的唯物論の立場—

黒田 治夫*

要約

本論は、心身問題に関する創発主義的唯物論からの議論を扱う。

第1に、マリオ・ブンゲが心身問題に対する議論を10分類したので、その分類を確認する。

第2に、その分類の中の創発主義的唯物論の立場に立つ日本人の研究者の議論を検討する。

まず、創発主義的唯物論は、ある段階になると心が創発することを合理的に説明できることを確認する。

そして、心の創発するシステムを、「複雑系」の理論によって説明しようとする主張をみる。また、心の内容は、身体や環境との関係が重要であると主張をみる。さらに、心の内容は、人間社会の歴史が反映するという主張をみる。そして、反映論の豊かな内容を理解して、これらの探究の手がかりとすべきであるという主張をみる。

キーワード：心身問題、創発、創発主義的唯物論、身体、複雑系

2014年9月29日受理（理論）

はじめに

神経科学の発展により、脳・神経系に関して今までわかっていなかったことが明らかになってきている。そこで、英米では心身問題などを議論する心の哲学がさかんである。

そして、マリオ・ブンゲが1980年に心身問題に対する見解を二元論5種類、一元論5種類の計10分類している。一元論か二元論かで大別し、その中をさらに主張の特徴によって整理し、その論者の名を挙げて分類している。その分類の中で、ブンゲは自身の立場を「創発主義的唯物論」と特徴づけその優位性を論じている。筆者は、心身問題を解明するには、ブンゲの分類が有効であると考えている。

そこで、日本の研究者で創発主義的唯物論の立場を表明している論者や、その立場であると筆者が考える論者について検討し、心身問題に関しする立場の有効性を明らかにしたい。しかし、創発主義的唯物論の論

者は、本論で扱う9名に限られるものではないが、この9名の議論を検討することで、心身問題に関して創発主義的唯物論の立場の優位性を確認できたらと考える。

1. マリオ・ブンゲ

(1) 心身問題に関する見解の10分類

マリオ・ブンゲが、心身問題に関する見解を10種類（精神物理的二元論5種類、精神物理的一元論5種類）に整理・分類した表で示しているため、その内容を要約して引用する。¹

その説明のなかに使われている「 ϕ 」は身体（または物理的なもの）を「 ψ 」は精神（または精神的なもの）を表している。

また、精神と脳の間を関係を示しているため、その説明のなかに使われている見解名を< >で引用する。その見解名を引用し合成するので、見解名がダブると

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：黒田治夫
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
E-mail：h.kuroda@kenko-fukushi.ac.jp

ころがある。²

まず、以下、精神物理的・二元論5種類からみる。

「D1<オートノミズム> ϕ と ψ は各々独立している。(これまで Wittgenstein 以外には擁護者はいなかった。)

D2<平行説> ϕ と ψ は平行的あるいは同時生起的である。(精神物理的平行説、予定調和説。Leibniz、R.H.Lotze、H.Jackson、一部のゲシュタルト心理学者)

D3<随伴現象説> ϕ は ψ に作用を及ぼす、つまり ϕ は ψ を引き起こす(あるいは ϕ は ψ を分泌しさえする)。(随伴現象説。T.H.Huxley、K.Vogt、C.D.Broad、A.J.Ayer、R.Puccetti)

D4<アニミズム> ϕ は ψ に作用を及ぼす、あるいは ϕ は ψ を引き起こす、あるいは賦活する、あるいは制御する。(アニミズム。Plato、Augustine、Aquinas、S.Freud、R.Sperry、K.R.Popper、S.Toulmin)

D5<相互作用説> ϕ と ψ は相互に作用を及ぼす。(相互作用説。Descartes、W.McDougall、J.C.Eccles、K.R.Popper、J.Margolis)』

つぎに、以下、精神物理的・一元論5種類をみる。

「M1<観念論> すべてのもは ψ である。(観念論、汎心論、現象主義。Berkeley、Fichte、Hegel、Mach、James、Whithead、Teilhard de Chardin)

M2<中性的一元論> ϕ と ψ は単一なもの非常に多くの側面ないしは現れである。(中性的一元論、二重側面説。Spinoza、James、Russell、Carnap、Schlik、Feigl)

M3<消去的唯物論> 何ものも ψ ではない。(消去的唯物論、行動主義。J.B.Watson、B.F.Skinner、A.Turing、R.Rorty、W.V.Quine)

M4<還元的唯物論(物理主義)> ψ は物理的である。(還元的ないしは物理主義的唯物論。Epicurus、Lucrētius、Hobbes、K.S.Lashley、J.J.C.Smart、D.Armstrong、P.K.Feyerabend)

M5<創発主義的唯物論> ψ は創発的な脳諸機能(諸活動)の集合である。(創発主義的唯物論。Diderot、C.Darwin、T.C.Schneirla、D.Hebb、D.Bindra)』

以上のように、二元論5種類、一元論5種類の計10種類の見解に分類する。

(2) マリオ・ブンゲの立場は、創発主義的唯物論

マリオ・ブンゲ自身は、M5の創発主義的唯物論の立場である。そして、創発主義的唯物論の3つのテー

ゼを示している。

「(1)すべての精神的状態、事象、過程は、高等脊椎動物の脳内の状態、事象、過程である。(2)これらの状態、事象、過程は、脳内の細胞的構成要素の状態、事象、過程に対して創発的である。(3)いわゆる精神物理的(つまり心身相関的)関係は、脳の様々の異なった諸下位システム間の、あるいはそれらのどれかと当の有機体の他の構成要素との間の、相互作用である。」³

第1の命題は、唯物論的な精神神経的一元論のテーゼである。第2の命題は、創発性のテーゼである。それは、精神的実事が、有機体的ないしは生物的同時に、集団的、つまり相互に連結された諸細胞の全集合体を含む、ということ述べている。第3の命題は、二元論の相互作用説的タイプの一元論的形態である。

以上のように、創発主義的唯物論の他の見解に対する優位性を述べている。

2. 坂野登

(1) 心身問題を一元論、二元論で分類

坂野登(1981)で、心を「基礎づけている脳のはたらき=神経系のはたらきに依存しながらも、それが環境とのあいだの積極的な相互交渉をとおして新しい性質として出現したもの」という。⁴

以下で、坂野が心と脳の間関係を、①ルリアの人間性の社会的歴史に求める、②ヘップの、同一物の異なった形式、③ダマシオの環境中で相互作用する脳と身体総体である有機体において理解することが重要であるとする点を見る。

坂野は、第1に、ロシアの神経心理学者ルリアを引用し、「エリ・エヌ・ヴィゴツキーが認めたように、大脳の直接的な機能として、心理にアプローチし、その源泉を大脳のなかに求める試みは、心理を精神[原語は $\mu\psi\chi = \text{spirit}$ で、‘たましい’の意味;坂野注]の存在形式だとみなす試みと同じように絶望的である。…人間の高次な心理諸機能を因果的に説明するためには、有機体の域を超え、その源泉を、精神[‘たましい’の意;坂野注]の奥底にでもなく、また、大脳の特殊性にでもなく、人間性の社会的歴史に求める必要がある。」と、人間の高次精神機能を説明するためには、人間性の社会的歴史に因果関係を求める必要があるという。⁵

第2に、カナダの心理学者Hebb(1980白井訳1987)

を引用し、「現在、心理学者たちは、心ということばにかわって、『認知過程』という用語を好んで口にしたがる。しかしまた、彼らの大多数は、それらの認知過程がどのようなものから成り立っているかとか、またそれらの過程がどのようにしてその働きを達成するかといったことについて考察するのをとめて差し控えようとしている。しかしながら、二元論者でなければ、思考しているのが脳である、ということに同意するはずである」と、脳が思考している(=心)ことを確認する。⁶

さらにヘップを引用して、「この制御を行っているなにかに関して、二つの構想が存在している。その一つは、心を霊的ないし非物質的なものとする構想であり、もう一つは、心を脳の物質的な活動とする構想である。…すなわちそれ[二元論；坂野注]は、一少なくとも現在のところでは一、人間理解に対する科学的アプローチにとって、邪魔なものである。…これにかわるもう一つの構想が一元論である。それは、心と物質が基本的には異なるものではなく、むしろ同一事物の異なった形式であるという構想である。」と、心と脳は同一事物の異なった形式であるという創発主義的一元論を確認する。⁷

第3に、坂野は、アメリカの神経学者Damasio(1994田中訳2000)を引用し、「(1)人間の脳と身体は分かっことのできない一個の有機体を構成している。…(2)有機体は一個の総体として環境と相互作用をしている。つまり、その相互作用は身体だけのものでもないし、脳だけのものでもない。(3)われわれが心と呼んでいる生理学的作用は構造的、機能的効果から生み出されているのであって、脳からだけではない。つまり、心的現象は環境中で相互作用している有機体という文脈においてのみ、完全に理解可能になる。環境は部分的には有機体の活動そのものの産物であり、このことは、われわれが考慮に入れなければならない相互作用がいかに複雑であるかを物語っている」と、心は環境中で相互作用する脳と身体との総体である有機体において理解すべきという。⁸

(2) 坂野登の立場は、創発主義的唯物論

坂野は自分の立場を、ヘップのいうように脳とところが「同一事物の異なった形式であるという構想」が、「多くのコンセンサスを期待できるという理由だけでなく、脳とところの関係を考える上で生産的であるという理由からも、最も妥当なものと考え」る、と述べて

ている。⁹

また坂野登(2012)で、再度、前述の三名を引用し、「本書の立場はこれら三名の立場と全く一致している。」と確認する。¹⁰

3. 久保田 競

(1) 手と脳、脳とところの関係について

久保田は、『前頭前野の働き』を私はつぎのように考えている。前頭前野は、外環境から与えられるあらゆる種類の感覚情報と脳内に貯えられている過去の記憶情報とを統合して、時間的にうまく組み立てられた適切な行動のプログラムをつくり、このプログラムを運動の出力系へ送っている。」と前頭前野の働きに注目する。¹¹

またフィネアス・ゲイジにふれて、「ゲイジで観察された症状の一部は、前頭前野の外傷や脳腫瘍でも観察される。前頭前野の障害は大きく分けると、注意力、思考、活動性、情動に関してみられる。」と指摘する。¹²

そして、久保田競(1998)で、「こうしたことから、『こころ』は脳の階層構造のいずれかの段階で発生するといえます。つまり、脳の階層構造『こころ』をつくるシステムだといえるでしょう。」と、脳の連合野が担っていると考えるという。¹³

そして、こころが「脳のどこで発生するのかを考えると、刺激を分析し、特定し、認識し、記憶する後部連合野(側頭連合野、頭頂連合野)や、反応指令を出す前頭連合野や運動連合野など、脳の連合野がその役割を担っている—そのレベルまで情報処理過程があがってきた段階から『こころ』が発生する、と考えるとかかなり整理されるのではないかと私は思います。」という。¹⁴

さらに、脳と心の関係を(心的)外傷後ストレス障害PTSDの例によってつぎのように説明する。

「PTSDを患った人の海馬が一般の人のものに比べて小さくなる傾向があるという驚くべき事実だった。海馬は脳の中で一番弱いところで、脳の条件が変わったり異常な刺激が加わったりすると、働きが低下したりてんかん発作を起こしたりする。(中略)この他にも、脳の中で感情に関わっている扁桃体(海馬のつけ根にある)や脳の前の方の前頭連合野という部分の機能にも異常が生じることがわかり始めた。PTSDは『心』『気持ち』の問題であるばかりでなく、その『心』や『気持ち』を生み出す『脳』という器官そのものの問題でもあっ

たのだ。』¹⁵

また、うつ病の場合について、「うつ病の患者の脳でも、脳の前頭連合野の一部が縮んでいることがわかっている。世間の7割の人が一生に一度はうつ病にかかると言われるほど、うつ病は現代人に多い心の病だ。その病気でも本人の『心』や『気持ち』だけでなく、『脳』自体に変化が起きていたのである。」という。¹⁶

このように、PTSDやうつ病の症例がしめすように、心が脳によって担われているということを確認する。

(2) 久保田競の立場は、創発的一元論

久保田は、自らの立場を創発的一元論であると、「脳には階層的に神経回路があり、しかも動物が高等になるにしたがって順次上位の方向に回路はつくり足されていく。回路が新しくつくられると、それがある機能を獲得するのです。この機能の結果が『ころ』ということになります。この論理を『創発的一元論』といいます。脳を『システム』として研究するには、こういう立場にたたざるを得ません。そしてこれが唯一の科学的立場です。」という。¹⁷

4. 澤口俊之

(1) 心身問題への回答を二元論と一元論に大別し検討

澤口は、心身関係の分類をマリオ・ブンゲに依拠しながら、さまざまな論を二元論と一元論に大別して以下のように述べる。

「二元論では心と脳は別の実体・プロセスだと考え、その間に相互作用があるとする。一方の一元論では『心は脳の活動・プロセスである』と考える。こうした哲学的な論争は今も続いており、脳科学者の中にも二元論を唱える者がいる。しかし、二元論は脳科学の成果によってほぼ否定され、一元論、とくに『創発的一元論』の立場から意識や自我を含めた心の問題を脳のレベルで解き明かしつつあるのが現代脳科学の現状である。』¹⁸

そして、二元論として、デカルト、ポパー、西脇与作、をとりあげる。そしてとくに、脳科学者エックルスの二元論の心脳相互作用説については、とりたてて検討・批判している。¹⁹

エックルスは、自我が脳の「補足運動野」に働きかけて随意運動をさせると説明し、また、自我がごく微小でもシナプスに対して働きかければ、ニューロンシステムの活動は大きく変化し得ると説明する。

この説明に対して澤口は、「これはちょうどカオスと似た現象である。カオス的なシステムでは、初期条件の偶然のゆらぎによって、システムの動向は大きく変化する。脳は確かにカオス的な側面を持ったシステムなので、シナプスの微小なゆらぎが、長じては脳活動を大きく変化させる可能性はある。」という。²⁰

そして、この二元論（心脳相互作用説）は、自我・心は実体として脳から離れて存在しているので、実体である脳・補足運動野のシナプスに働きかけるという説明を必要とすると澤口は批判する。²¹

つぎに、観念論の一元論として大森荘蔵の「無脳論の可能性」に言及している。しかし、澤口は、現代脳科学の立場は、おおむね創発的一元論であると批判する。²²

(2) 澤口俊之の立場は、創発的一元論

現代脳科学の現状は、創発的一元論の立場から研究をすすめているといい、自らもその立場であるという。そして、澤口俊之（1997）でつぎのようにいう。

「『創発的一元論』は心や脳の進化を考察する上でも便利な考え方である。たとえば自己意識は進化の過程で、あきらかに創発的に発生してきた。つまり、脳に新しい構成要素が進化的に付け加わることによって、それまでの脳システムでは見られなかった性質として、自己意識が進化してきたと考えられるのである。こうしたことは言語や思考などの進化でも起こってきたと考えることができる。」

このように、創発的一元論は、自己意識の創発だけでなく、言語や思考の創発も説明できる考え方であるという。²³

5. 山鳥重

(1) 心身関係を6種類に分ける

山鳥重（2011）で、脳と心の関係を6種類に分けるので、要約して引用する。²⁴

①心と脳は「独立である」として、ヒポクラテス、プラトン、デカルト、ベンフィールド、エックルスをあげる。②脳が心を「直接に作り出す」として、ガル、ブローカをあげる。③心と脳は「対応して働く」=心・脳同時生起論として、スペンサー、ジャクソンをあげる。④心は「脳の進化に伴って創発する」=心の創発説として、マイケル・ポラニをあげる。⑤心は「脳の随伴現象である」として、ハックスリーをあげる。⑥心と脳は「同じ1つのもの」として、スピノザ、ファイ

グルをあげる。

しかし山鳥重 (2003) では、脳と心の関係を5種類あげていたので、要約して引用する。²⁵

①心は脳と別々に「独立に」存在するとして、デカルト、エックルス、ポパーをあげる。②心と脳は「対応して」存在するとして、ジャクソンをあげる。③心は脳の副現象であるとして、人名はあげていない。④心は生命の進化にともなって出現したとして、ポラニをあげる。⑤心と脳は「同一」の現象であり、見方が違うだけであるとして、ハースをあげる。

山鳥の独自の分類は、ブンゲのように一元論か二元論かを大別しないものである。そして、独自の分類を山鳥重 (2003) の5種類から山鳥重 (2011) の6種類に変更している。

(2) 山鳥重の立場は、脳同時生起論と創発説

山鳥は、自分の立場を、「第3のジャクソンが唱えたところ・脳同時生起論と、第4のポラニの説くところの創発説です。両者は違うようですが、共通点も多いのです。」という。²⁶

まず、ジャクソンの「ところ・脳同時生起論」を、「お互いに対応して生じているのであって、直接的にどちらかがどちらかを干渉することはない、と考えました。どちらかをどちらかの原因と考えない、という立場を打ち立てたのです。」と説明し、「ところ・脳同時生起論」を支持する理由を、「神経過程と心理過程は、神経過程がところを創発させる、という脈絡において、緊密に対応していますが、だからといって、神経過程そのものが心理過程であるわけではなく、おたがい、質の違う世界を実現しているのです。」という。²⁷

神経過程と心理過程は、対応して生じたが、直接的にどちらかがどちらかを干渉することはない質の違う世界を実現しているという。山鳥の脳同時生起論は、ジャクソンを例示しているので、ブンゲのD2<平行説>であり、二元論の主張である。

そして、第4の創発説を支持する理由を、「複雑な神経活動の発達の歴史のどこかの段階で、ところの活動が出現し、神経過程の一定の活動に対応しながら、ところの活動も進化してきたのだと考えられます。この対応は、(中略)ある量を含むニューロン・ネットワークの構造が、あるおおまかなところの働きに対応し、ところはところで、物理化学的機能構造である中枢神経系とは異なる、独自の構成原理を持ち、独自の心理活動の実現原理を持ってところを進化させてきたもの

と考えられます。」といい、神経活動とところの原理的独自性を強調する。²⁸

6. 小泉英明

(1) 心身問題のキーワード「身体性」、「複雑性」、「統合機能」

小泉は、身体と心の関係を、ダマシオに依拠し、「体があるから、だから自分たちの精神・心があるのだというのは、サイエンスでいえば真理の可能性は強いわけです。」という。²⁹

しかし小泉は、精神・心が身体だけで規定されるものではなく、「複雑性」でとらえる必要があると、「これは、いわゆる心身二元論、一元論という議論とはちょっと違っていて、だからといって精神というものは、全部、体で100パーセント規定されるものかという、もちろんそう簡単には解釈できません。そこにはもう一つ、複雑性という考え方が入ってくる余地があります。」という。³⁰

その「複雑性」を、「カオスの一つの定義は『決定論的なシステムが作り出す予測不能な確率論的な運動』とも言えるでしょう。カオスの特徴として、初期状態への敏感な依存性があるのですが、天文学的な数の神経と神経接続からなる私たちの脳も、いたるところでカオスの特徴が顔を出す。」と、カオス論によって説明する。³¹

また小泉は、脳の「統合機能」を、「最先端の脳科学研究者が最も関心を抱いて取り組もうとしている研究テーマで、『バインディング・セオリー (binding theory)』と呼ばれています。分解した要素を統合する場合、バラバラな要素にタグのようなものをつけて統合していくのかもしれませんが。あるいはタグをつけずに何か別の情報を媒介しているのかもしれない。通常、情報はボトムアップという形で抹消から中枢へ上がってきますが、中枢から末梢へ走っている神経系もあります。神経系統は、必ず情報の上向性と下向性が対になっている。」と説明する。³²

小泉は、環境からもたらされた要素を統合するとき、神経系統は、必ず情報の上向性と下向性が対になっていることに注目しておくことが重要であるという。

また小泉は、認知構造の三次元ピラミッド型モデルを提案する。

「脳は環境に対して開かれているという視点が重要です。脳だけを取り出して考えてみても、脳は十分に

理解できません。脳が環境と直接関わりを持って情報処理をしている世界を外部世界 (external world) と名づけてみます。換言すれば、事実の集積からなる実世界です。それに対して、脳の内部で創られている一つの世界があります。脳は自分のメモリから情報を引き出し、思考によって情報処理し、脳の中に一つの内部世界 (internal world) を表します。このように世界を区分してみた際に、内部世界 (internal world) が形而上的 (metaphysical) 領域、外部世界 (external world) が形而下的 (physical) 領域に対応するのではないかと考えています。』³³

小泉は、「外部世界」を反映して、「内部世界」がうまれるというモデルを考える。

また、小泉は、哲学の「ハードプロブレム」と「イージープロブレム」にふれて、主観に2種類あり、『「どうやってもそれが証明できない」主観と、『いろいろな形で証拠が得られる』主観』とがあり、「後者であれば脳科学からアプローチすることができる。」という。³⁴

そして、「脳科学という言葉は、だんだんと世界で使われる頻度が高くなっていくと思います。それは一つには、一元論に近づいていくだろうということです。つまり、脳がわかれば心の一部が分かってくっていくことですね。しかし、完璧な一元論というのは、専門家はもちろん望んでいませんし、そんなことはおこがましいと考えているはずです。」という。³⁵

以上から、小泉は、①認知は外部世界を局在領域から連合野が統合する。②脳がわかれば心もわかってくるので、一元論に近づく。③しかし、それは完璧な一元論ではない。④創発ということばは使わないが、脳は複雑性をもつ統合機能をもって心を構成すると、いう。

しかし、一元論か二元論かどちらか一方しかない場合において、「近づく」とか、「完璧な」というとらえ方は、問題をあいまいにしているといえる。

(2) 小泉英明の立場は、複雑性をもつ統合機能による一元論

小泉は、複雑性に依存しつつ脳が、環境と直接関わりを持って情報処理をしている外部世界を反映して、脳は自分のメモリから情報を引き出し思考によって情報処理し脳の中に一つの内部世界がうまれるという。

また脳科学は、脳がわかれば心の一部が分かってくっていくことで一元論に近づいていくだろうという。

小泉英明の立場は、外部世界は内部世界に反映され、脳によって統合される複雑性をもつ一元論である。

7. 池谷裕二

(1) 心は、身体と脳、無意識と意識の相互作用のプロセスの全体

池谷は、体と脳と心の関係について『「心」というのは脳が生み出している。つまり、脳がなければ『心』はない。でも、体がなければ脳はないわけだから、結局は、体と心は密接に関係していることがわかる。』という。³⁶

また、心にとって言葉の重要性を『「心」を生み出すのは『言葉』である』という。³⁷

そして、心について、「身体と脳の相互作用、無意識と意識の相互作用のプロセスの全体、これが『心』の姿 (中略) そのどれもが欠けても、私たちの『心』は形成されない。だから『心は脳だけに局在する』と短絡的に考えるよりは (中略)、むしろ心は全身に、さらには周囲も含めた環境に散在すると言った方が適切だと思う」という。³⁸

さらに創発について、「こうやって、数少ない単純なルールに従って、同じプロセスを何度も何度も繰り返すことで、本来は想定していなかったような新しい性質を獲得する。これを『創発』と言う。」という。³⁹

その創発は複雑系のシステムで生まれるという。

「所詮、個々のニューロンは忠実な緻密機械にすぎない。彼らはただひたすらに、自分に届く『ゆらいだシナプス入力』に従って、忠実に出力をし続けているだけだ。(中略) それにもかかわらず、周囲との関係性の中で、全体としては見事な秩序が生まれてくる。いや、正確に言えば、生まれてしまう。回路の中のニューロンは意図せず勝手に創発してしまう。これこそが集合ダイナミクスの特徴で、いわゆる『複雑系』というシステムの醍醐味でもある。』⁴⁰

その創発の産物の心は、複雑系のシステムによって生まれたという。

「その創発の産物のひとつが『心』だ。だからこそ、『心』は予想外な産物だったし、それゆえに、崇高でさえある。でも、創発は、実のところ、驚くほど少数の簡単なルールの連鎖で勝手に生まれてしまうもの。それを、僕らが一方的に『信じがたい奇跡』に触れたかのように、摩訶 (まか) 摩訶不思議に感じているだけ。』⁴¹

(2) 池谷裕二の立場は、複雑系から生まれる創発的一元論

池谷は、脳と心の関係について「心というのは脳が生み出している。つまり、脳がなければ『心』はない。」という一元論である。

また、心は「身体と脳の相互作用、無意識と意識の相互作用のプロセスの全体」という。

そして、「その創発の産物のひとつが『心』だ。」と、心は複雑系のシステムによって創発によって生まれたという。

8. 種村完司

(1) 心身関係に対する回答は大別して三つ

種村完司（1998）『心-身のリアリズム』で、ブンゲの分類の紹介と評価をしている。そして唯物論研究年誌（2001）で、心身関係への諸回答には、大別して以下の三つになるというので、要約して引用する。

第1は、「現象学的身体論が主唱している『精神=身体』説」で、メルロ・ポンティや市川浩をあげる。⁴²

第2は、「デカルトの物心二元論を継承し、諸科学の実証的成果もとり入れつつ、現代的に洗練された『心身二元論』を主張する立場」で、エクルスやポパーをあげ、山本信など日本にもこの立場を支持する哲学者は少なくないという。⁴³

第3は、「意識・精神を物質の最高の発展形態である脳の機能と捉える『唯物論的一元論』の立場」である。⁴⁴

しかし、この第3の唯物論的一元論にも以下のようにいろいろあるとつぎのようにいうので、要約して引用する。⁴⁵

- ①精神を物理的諸状態の集合と捉える「物理主義的唯物論」
- ②意識活動を脳の機能とみるが精神の創発性を重視する「創発主義唯物論」
- ③心的状態=脳の状態とみる「心脳同一論」（この中には、③-a物理主義にたつ心脳同一論もあれば、③-b創発主義に立つ心脳同一論もある）
- ④身体の社会的文化的活動を通しての意識形成と高次精神機能の構造化を重視する、ヴィゴツキーやルリアたち
- ⑤生物進化・人間進化過程で、志向性を質的に高めた意識成立を説くデネット

(2) 種村完司の立場は、創発主義的唯物論

種村は、自己の立場を、「私自身は、結論からいうと、心身関係に対する回答としては創発主義的唯物論を支

持している。同時に、心身関係は心脳関係を大きく越え出る問題群や内容を含んでいると考えるので、身体の自然性・文化性を重視した心身関係論の構築がぜひとも必要だ、という立場である。」と述べる。⁴⁶

そして、種村は、自身の心身関係論を構築するためにと、①ヴィゴツキーとルリアの高次精神機能の研究、②チャーチランドの神経工学の発展、③デネットの進化論的心身論をより詳しく検討している。⁴⁷

(3) 種村完司の現象学的一元論批判と心身二元論批判

種村自身も身体を重視するのであるが、しかし、メルロ・ポンティや市川浩の「精神=身体」論の現象学的一元論を以下のように批判する。

まず、「だがこの長所（=身体の社会的文化的な本性を把握している点；筆者）は、他面の短所と表裏一体となっていた。身体の精神化は、身体の自然的生理的側面の切り捨てないし忘却でもあった。」⁴⁸

そして、「『精神=身体』論のいっそう重要な誤りは、高次精神機能の基礎である中枢神経系の決定的な役割を無視する点にある。」⁴⁹

また、種村は、エクルスとポパーの心身二元論を批判する。

まず、「彼らの主張の特色は、創発的進化の産物である意識にとっての身（脳）の物的基礎性を容認しながらも、脳の生理的活動に帰着させえない、人間の意識や精神の非物質性・自律性・創造性を強調し、擁護する点にある。」という。⁵⁰

さらに、「ここには、中枢神経系の成立とともに、ひとたび自我が創発的に形成されたあとは、中枢神経系がどれほど質的に高度なものへ発展しようと自我はまったくその影響を受けない、という非実証的なドグマティズムが存在している。」と批判する。⁵¹

9. 牧野広義

(1) 意識の能動性と反映論

牧野広義（1995）において、マルクス・エンゲルスやレーニンの古典から受け継ぐ価値のある、意識の能動性と反映論についての基本的なカテゴリーを検討している。

そして、反映には二重の意味があることについてつぎのように述べる。「現代唯物論にとって『意識は存在を反映する』ということの意味は明らかであろう。それは第一に、人間は自然や社会の対象を認識するとい

う意味で反映する。つまり、唯物論にとって世界の認識とは、それを意識のなかに再現し、模写するという意味で反映するという意味で反映することにはかならない。第二に、人間はそのような自然や社会の認識において、主体自身の現実的な生活過程に規定されて、この生活過程をその認識内容のうちに映し出すという意味で、反映する。これは主体自身の反映であり、その主体を規定している社会的存在の反映でもある。反映は常にこのような二重の意味をもっているのである。」⁵²

また、牧野広義(1998)において、レーニンの「人間の意識は客観的世界を反映するだけではなく、それを創造しもある」という言葉の理解についてつぎのようにいう。

「人間の意識は、認識において客観的世界を反映するからこそ、実践において客観的世界を变革し創造するにあたって、その能動性・創造性を発揮できる、という意味で理解できるのである。それは、実践における意識の能動性・創造性を反映論の立場から積極的にとらえた言葉であって、なんら反映論の不十分性の指摘でも、反映論の超克でもないのである。」⁵³

そして、牧野広義(2004)において、脳科学の現状について簡潔な要約をして、意識と脳をめぐる諸問題を検討して、つぎのようにいう。

英米の「心の哲学」の多くも唯物論を主張してきた。しかし、「『心身問題』をテーマにしながら、実際の議論は『心脳問題』に限定され、意識にとっての身体の意義はほとんど論じられ」ない。また、「意識と外的世界との関係もほとんど問題にされ」ない。つまり、「心と脳を論じながら、身体や客観的世界は論じない」と批判する。⁵⁴

これに対して牧野は、アントニオ・ダマシオが心を理解するためには「脳と身体、人間と環境との相互作用を理解すべきである」として、「『心的現象は環境中で相互作用している有機体という文脈においてのみ、完全に理解可能になる』」という点を評価する。⁵⁵

このような主張は、ルリアやヴィゴツキーらによって以前から主張されてきたとし、「ソビエト心理学は、このような主体と環境との相互作用にもとづく『能動的反映』の見地から、高次心理機能の社会的研究において、注目すべき成果をあげてきたのである。」と指摘する。⁵⁶

そして牧野は、自らの見解を、「哲学においても、

神経生理学や計算理論の成果を取り入れながらも、意識は身体の有機的構成部分である脳の機能であり、意識は社会的・歴史的現実の中で、存在を反映するという見地を基礎にしてこそ、意識や心にかかわる世界観的問題もいっそう解明できると、私は考える。」と述べる。⁵⁷

(2) 牧野広義の立場は、創発主義的唯物論

牧野広義(2004)において、欧米系の「心の哲学」の議論をみた後、マリオ・ブンゲの「創発主義的唯物論」を紹介する。そして、創発主義的唯物論の優れている7つの理由を紹介したあと、つぎのようにいう。

「このようなブンゲの『創発主義的唯物論』は、心身問題に対する唯物論的解答として最も支持できる見解であるろう。」と自身の立場を明らかにしている。⁵⁸

10. 武田一博

(1) 「心の唯物論」の3グループ

武田は、心の唯物論が二元論や心の観念論に対して勝利を収めつつある中で、神経科学とコンピュータ・サイエンスに関して、心の物質性に関する基本的見解の対立が存在していると述べ、以下の3つのグループをあげるのを、要約して引用する。

第1のグループは、「心は高次神経系に固有の機能であり、かつ、そこでおこなわれていることは情報処理(計算)である。この意味で、心とコンピュータはアナロジーをもつが、両者は同一でないと考えている(P.M.Churchland, P.S.Churchland, D.E.Rumelhartら)」⁵⁹

第2のグループは、「心とは情報処理(計算)過程であるが、それは神経系において実現されるだけでなく、コンピュータにおいても実現可能である。つまりコンピュータも心をもちうる、と考える(H.Putnam, J.Fodor, Z.W.Pylyshyn, M.Minsky, D.C.Dennettら)」⁶⁰

第3のグループは、「心は高次神経系において固有に実現されるものであるが、それはいかなる意味においても記号処理(計算)過程ではない(コンピュータとデイス・アナロジーである)、と見なす(J.Searle, J.Z.Young, G.M.Edelman, R.Penroseら)」⁶¹

(2) 武田一博の立場は、心の唯物論の第1グループ

武田は、自身の立場を心の唯物論であるとしてつぎのようにいう。

「そのことは、高次神経系(心)の存在や活動全体がコンピュータによって置換可能であることを意味し

ないし、置換すべきである(つまり、コンピュータによる自動化社会が望ましい)ことをも意味しない(この点で、私は、心とAIを同一視する『強いAI』ではなく、AIによる心の解明のみを認める『弱いAI』の立場をとる。)」と心の唯物論の第1グループであることを表明している。⁶²

(3) 武田一博の問題意識

武田は、一貫して英米の心の哲学を追いかけて、以下のような問題意識をもって取り組んでいる。

「わが国の唯物論陣営を見れば、いまだに人間の認知過程を『意識の反映機能』で捉えようとしたり、心的過程を『現象学』的に、内観の主観的報告にのみ基づいて理解しようとする傾向が根強く残っている(中村2000、武田2000a参照)。こうした議論が現代唯物論哲学の標準的見解だとしたら、それは古臭い(レーニンに遡る)スキームを固持しているだけであり、その唯物論は過去の遺物と見なされるだけであろう。」⁶³

武田は、唯物論が科学的議論でありうるためには、「心や人格を脳一身体のニューラル・ネットワークに基づいて理解し、説明しなければならない。そして、われわれのあらゆる心的活動がニューラル・ネットワークの働きによって成立するものであると理解することは、それがもつ世界像、自己像は、ニューラル・ネットワークによって形成され構成されたものにほかならず、したがって、ネットワークが(種の間で、個体間で、同一個体内で)異なれば、おのずと世界像、自己像もまた異なった形で成立するということである。」という。⁶⁴

武田のような反映論理解に対して、牧野は、「このように見てくると、反映論の射程は、人間の意識の認識論的機能、価値的機能、実践的機能の全体にわたるものであると言えるであろう。また、反映論は、意識の多様な機能をあくまでも人間と現実世界との関係の中でとらえ、現実世界にかかわる人間の意識の能動性や創造性を明確に位置づけるものであることも、明らかであろう。」と述べている。⁶⁵

おわりに

まず、多くの論者が手がかりにしているブンゲの分類の有効性が、明らかとなったと考える。

そして、9名の立場は、基本的に創発主義的唯物論であると考えられる。久保田、澤口、山鳥、池谷、種村、牧野、武田は、創発主義的唯物論の立場を自身が表明

している。坂野も創発主義的唯物論のルリアやヘップやダマシオを支持し、小泉も心が創発することを脳が複雑性をもつ統合機能によるといい、創発主義的唯物論の立場である。

また、論者の主張する力点は多少違うが、創発主義的唯物論の立場が、心が創発することを科学的に解明できるものであることを主張している。

さて、その創発のメカニズムが、今後、科学的に解明されなければならない。その点で、小泉は、脳は複雑性をもつ統合機能をもって心を構成するといい、「複雑性」のシステムの観点が有効ではないかと考える。池谷も、単純なルールで同じプロセスを何度も繰り返すことで、想定していなかった新しい性質を獲得することを創発と説明し、「複雑系」のシステムで解明できると考える。

しかし、複雑系の理論はまだ確立された理論ではない。⁶⁶ 複雑系の考え方によって、神経科学がどのように解明していくかは今後の課題であり、注目していきたい。

また、ダマシオに学ぶ坂野、小泉、池谷、種村、牧野らが言及しているように、心身問題が、心脳問題に限定されるのではなく身体と環境の重要性に注目すべきである。

さらに、坂野、牧野がルリアに注目し心は人間性の社会的歴史に求める必要があるという観点も重要であると考えられる。

そして、武田と牧野の反映論に対する評価の違いから学ぶのは、古典的理解を正確にくみ取りそれを手がかりとしつつ、新しい精神科学の成果を踏まえて、発展させることが重要であると考えられる。

脚注・引用文献

- 1 マリオ・ブンゲ、1982、黒崎宏・米澤克夫訳、『精神の本性について—科学と哲学の接点—』、p.3、産業図書
- 2 同上、p12
- 3 同上、pp.28-29
- 4 坂野登、1981、『脳のはたらきと子どもの教育』、p.6、青木書店
- 5 坂野登、2010、「脳とこころ」、『教育心理学年報』、vol.49、p.162、日本教育心理学学会
- 6 同上、p.162
- 7 同上、p.163
- 8 同上、p.163

- 9 同上、163-164
- 10 坂野登、2012、『二つのところと一つの世界—心理学と脳科学の新たな視角—』、pp.199-200、青木書店
- 11 久保田競、1982、『手と脳—脳の働きを高める手—』、p.81、紀伊國屋書店
- 12 同上、p.85
- 13 久保田競、1998、『脳を探検する』、p.153、講談社
- 14 同上、pp.153-154
- 15 久保田競、2003、『ランニングで頭がよくなる』、pp.32-33、KKベストセラーズ
- 16 同上、p.34
- 17 久保田競、1998、『脳を探検する』、p.154
- 18 澤口俊之、1997、『脳と心のバイオフィジックス』、p.31、共立出版株式会社
- 19 同上、pp.36-41
- 20 澤口俊之、1997、『「私」は脳のどこにいるのか』、p.57、筑摩書房
- 21 同上、p.59
- 22 澤口俊之、1997、『脳と心のバイオフィジックス』、p.36
- 23 澤口俊之、1997、『「私」は脳のどこにいるのか』、p.62
- 24 山鳥重、2011、『心は何でできているのか—脳科学から心の哲学へ—』、pp.85-91、角川選書
- 25 山鳥重、2003、『脳のふしぎ—神経心理学の臨床から—』、pp.342-345、そうろん社
- 26 山鳥重、2011、『心は何でできているのか—脳科学から心の哲学へ—』、p.92
- 27 同上、p.88、p.93
- 28 同上、pp.92-93
- 29 小泉英明、2005、『脳は出会いで育つ—「脳科学と教育」入門—』、p.135、青灯社
- 30 同上、p.135
- 31 同上、p.136
- 32 同上、p.223
- 33 同上、p.226
- 34 小泉英明、2011、『脳科学の真贋—神経神話を斬る科学の眼—』、p.30、日刊工業新聞社
- 35 同上、pp.36-37
- 36 池谷裕二、2007、『進化しすぎた脳』、p.317、ブルーバックス
- 37 同上、p.318
- 38 池谷裕二、2013、『単純な脳、複雑な「私」』、p. 206、ブルーバックス
- 39 同上、p.372
- 40 同上、p.377
- 41 同上、p.411
- 42 種村完司、2001、『「心・からだ・脳、そして自己・人格」』、『唯物論研究年誌』、第6号、p.35、唯物論研究協会
- 43 同上、p.35
- 44 同上、p.35
- 45 同上、p.35
- 46 同上、pp.35-36
- 47 同上、pp.39-50
- 48 同上、p.36
- 49 同上、p.37
- 50 同上、p.38
- 51 同上、p.38
 プングについては、種村完司、1998、『心—身のリアリズム』、pp.195-200、青木書店／エクルス、ポパーについては、同上、pp.188-195／メルロー・ポンティについては、種村完司、1994、『知覚のリアリズム』、勁草書房を参照
- 52 牧野広義、1995、『哲学と現実世界』、p.72、晃洋書房
- 53 牧野広義、1998、『現代唯物論の探求—理論と実践と価値』、p.149、文理閣
- 54 牧野広義、2004、『哲学と知の現在—人間・環境・生命』、p.89、文理閣
- 55 同上、p.90
- 56 同上、pp.90-91
- 57 同上、p.91
- 58 同上、pp.70-71
- 59 武田一博、1997、『第5章心の唯物論と現代科学—ニューロ・コンピュータ理論による心=脳モデル—』、『心と認識—実在論的パークベクティブ—』、p.167、昭和堂
- 60 同上、p.167
- 61 同上、p.167
- 62 同上、p.209
- 63 武田一博、2001、『「心の唯物論と人格性の問題」』、『唯物論研究年誌』、第6号、p.106、唯物論研究協会
- 64 同上、p.106
- 65 牧野広義、1998、『現代唯物論の探究—理論と実践と価値』、pp.149-150
- 66 菅野礼司、2013、『複雑系科学の哲学概論』、本の泉社、ほかの文献を参照した

Discussion of emergent materialism as a solution to the mind-body problem

Haruo Kuroda*

Abstract

The main treatise of this paper discusses emergent materialism as a solution to the mind-body problem.

First, the ten modes of individualism propounded by Mario Bunge are considered in the discussion of the mind-body problem. Secondly, emergent materialism is examined. To begin with, at a certain stage, emergent materialism shows that the mind can reasonably explain the principle of emergence.

An attempt to explain the emergence of the mind with the theory of "Complex systems" is also presented. When the relation between the body and the environment is significant, the contents of the mind are affected. In addition, the contents of the mind reflect the history of human society. Therefore, we need to understand the many aspects promulgated by reflection theory, and to assume the clue of these searches is seen.

Key words: Mind-body problem, emergence, emergent materialism, body, and complex systems

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Haruo Kuroda
〒590-0014 2-8 Tadei-Cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Welfare
E-mail : h.kuroda@kenko-fukushi.ac.jp

